第Ⅳ部門　　大都市市街地内の工場集積地における市民の定住意向と心象風景の変化に関する研究

大阪工業大学　　学生員　○木山　広宣
大阪工業大学　　正会員　　岩崎　義一

１．はじめに

我が国では、高度経済成長期に多くの工場が集まる工業地帯が形成されていた。しかし、現在は、廃業や生産拠点の統廃合、海外への移転によって工場が閉鎖されている。また、人口増加および世帯数の増加に伴い、その工場用地は他の都市的用途に向けられ、再開発事業によってまち並みが変化している。そこで本研究は、工場用地が他用途へ転用され、変化するまち並みが住民の定住意向と心象風景にどう影響しているのかを検討する。方法は、1980 年時に工場用地として利用されていた土地利用状況を 2011 年 8 月 31 日に調査した。その結果を踏まえ、聞き取りアンケート（2011 年 11 月 4 日・102 件）を実施した。

２．大阪市内の土地利用変化特性

大阪市土地利用現況より建物用途を住居系（住居施設）、商業系（商業施設＋業務施設＋娯楽施設）、工業系（工業施設＋運輸施設）と３つの型に集約・分類し、構成比（土地利用面積比率）に応じて三角座標（1975-2000）により土地利用型変化のタイプ（型）を分類した。なお経年的に面積変化の少ない文教施設、医療施設、宿泊施設、供給処理施設や分類されない官公署施設、その他施設は除外した。

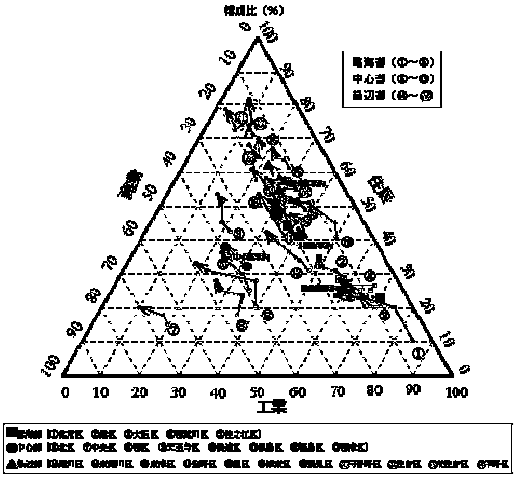


図１　三角座標による大阪市の土地利用型（1975-2000 年）

市内の建物用途による土地利用の面積構成比の年次変化をみると臨海部・中心部・縁辺部の 3 地域に属する各区の変化動向が明瞭に、この 3 地域の都市的性格に表すように推移している。この 3 地域の平均値の変化から、縁辺部がより住居系への移行が大きかったことがわかる。特に、城東区・東成区・鶴見区では工業系から住宅系への変化が大きかった。以下この 3 区を研究対象 3 区とした。

３．研究対象 3 区の旧工場用地利用現況

旧工場用地の土地利用現況踏査結果は図 2 の通りである。

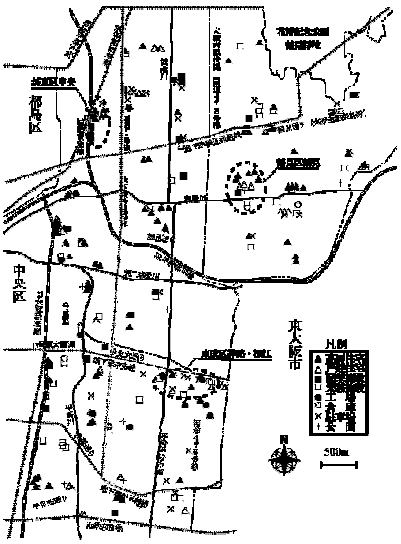


図２　対象 3 区における旧工場用地の利用現況

これによると、城東区の中央地区、東成区の神路・深江地区及び、鶴見区鶴見地区が著しく進行していることがわかった。特に中央では高層の共同住宅へ、鶴見区では住宅や公園へ、神路・深江では、小規模な民営駐車場へ、それぞれ転用される傾向が強かった。以下、この 3 地区（対象 3 地区という）に絞って分析を行った。

４．対象 3 地区における市民の定住意向とまちの印象

住み続けるための条件において、『都市的利便』『安心・安全』『地域社会』『環境』『教育・文化』の 5 つのカテゴリーに属する選択肢で聞いたところ、『都市的利便』に属する「交通の便が良い」、「商業施設の近さ」が最も高かった。一方、住まいのまちの印象について、聞いたところ「都市的利便の現状に満足」が最も高く、これを居住年数期間帯別にみると、居住年数は長いほど高い傾向にあった。しかし、居住年数の長い高齢者に限定すると都市的利便が悪い印象の回答割合が高く、これは都市的利便を実感あるいは享受できる機会が減少することが要因と考えられる。

Hironobu KIYAMA，Yoshikazu IWASAKI
planning@civil.oit.ac.jp

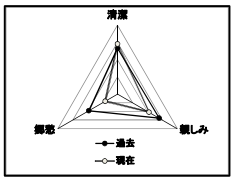


図3　市民の工場のある（あった）まちに対する心象風

次に、『周囲のまち並み』の印象についてやすらぎや望郷感など種々のイメージについて聞いた。これを因子分析したところ、大きく 3 つの因子（清潔、郷愁、親しみ、以下 3 大因子という）が得られた。対象 3 地区全体において、住まいのまちの印象について昔と現在を比較させたところ、3 大因子に括ると過去と比べ現在は郷愁（懐古感、望郷感、郷愁感）が希薄化している結果となった（図-3）。また、『工場が混在していたまちの印象』に対するイメージと 3 大因子中の郷愁に属するイメージとでクロス集計したものを回答件数で単位化し、昔と現在で比較（差をみた）したところ、「産業技術伝承・継承の場」は懐古感・望郷感（時代や故郷を懐かしむ）へ、「生産現場の息づかい・活気」は郷愁感（故郷を慕う）に影響している。

5．市民の転用区分別意識

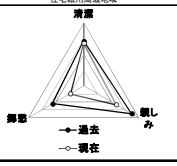
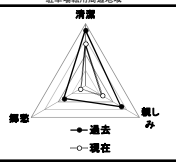
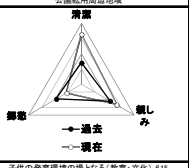
対象地区	城東区中央	東成区神路・深江	鶴見区鶴見
対象地域	住宅転用周辺地域	駐車場転用周辺地域	公園転用周辺地域
心象風景			
メリット	生活必要施設の立地が進む（都市的利便） 57% 人通りが多くなり、安心感が増す（安全・安心） 34%	交通の便が良くなる（都市的利便） 41%	子供の発育環境の場となる（教育・文化） 61% 災害時の避難場所となる（安全・安心） 58% 生活がうるおう（環境） 58%
デメリット	周辺地区のマナーの低下（地域社会） 54% 駐車場不足による違法駐車の増加（都市的利便） 40%	周辺地区のマナーの低下（地域社会） 58% 交通事故のリスクが増加する（安全・安心） 42%	若者のたむろなどが増える（安全・安心） 64% 鳥の糞やフンの被害が増える（環境） 45%
定住条件	都市的利便 80% 安全・安心 54% 環境 51%	都市的利便 85% 安全・安心 76% 教育・文化 74%	都市的利便 94% 地域社会 55%

図4　転用区分別　市民の心象風景と意識

対象 3 地区ごとに住民の意識をみた。まず、中央では工場から住宅へ転用に関し、メリットとして「生活必要施設の立地が進む」が最も挙げられ、現在の住まいのまちについて、清潔（清潔感・安心感・開放感）の向上に寄与している結果となった。一方で、「駐車場不足による違法駐車の増加」が親しみ（親しみ感・やすらぎ感・にぎわい感）を低下させる要因となり、郷愁も失われる結果となった。次に神路・深江では工場から駐車場へ転用に関し、メリットとして「交通の便が良くなる」が最も挙げられた。また、現在のまちの印象について、特に郷愁、親しみが失われている結果となった。安全・安心について、定住する必要条件において安全・安心が求められていることは、デメリットである「交通事故のリスクの増加」が要因であると考えられる。最後に鶴見では、工場から公園へ転用に関し、「子供の発育環境の場となる」が最も挙げられた。また、性別で集計すると、上記回答は女性の割合が高く、加えて子供の有無別で分析を行うと、子供のいる女性の割合が高かった。また、公園への転用のある鶴見地区において、郷愁が低下する一方で、清潔、親しみといった子育て環境の安心に関わる項目に寄与する結果であった。以上を要約すると、都市化は好まれつつも郷愁が消失していることがわかる。また、3 大因子を潜在的な構成概念と位置づけ、定住条件に該当する 5 カテゴリーの回答状況で共分散構造分析を行った。これによると、市民の定住条件として挙げられた都市化に伴い、利便性は向上するが親しみと郷愁の希薄化する関わりが見てとれる結果となった。

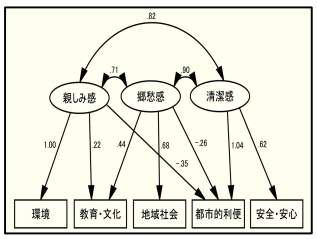


図5　工場用地の転用に伴う市民の意識構

6．市民のまちづくりへの参加意向

住民は街並み変化を受容しつつも、地域のまちづくりに関与していく機会があるはずと考える。ここで、市民がまちづくりに関わる情報の交換・開示の場への参加意向は居住年数が長くなると、高くなる傾向にあった。特に地域住民また、行政が主体となる「自主的な勉強会」や「計画策定活動」、「都市整備の説明会」については参加意向が高い傾向にあった。このことから市街地形成地区の周辺住民は、住み続けることでまちに愛着を持ち、まちづくりに能動的に関わる意欲があることが明らかとなった。

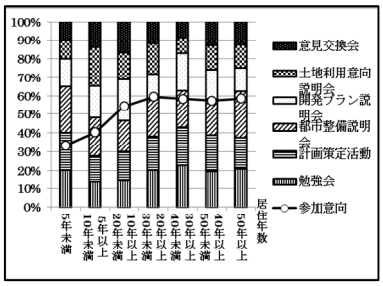


図6　市民のまちづくりへの参加意向と居住年数の関係

7．結論

以上より次のことを明らかにした。①定住のためには都市的利便の充実が重要であり、その充足度が長期永住に深く関わっている②かつての工場が存在したまちに時代や故郷への愛着や希求を重ねている③定住に不可欠な都市的利便とかつてまちに対する心象風景との間に意識構造上トレードオフの関係がある④居住年数が長くなるほどまちづくりへの関心が深まる。以上のことから、工場があったまち並みの変化は住民の定住意向に影響し、かつて育んできた心象風景の喪失を内包するものとなっており、気持ち（心）の満足を放擲した近代都市計画への抵抗感を惹起しているように思う。もっと種々のあたたかみを彷彿させる心象風景を具現化しうるまちづくりの制度確立が必要であると考えられる。